

JSHCT Letter No.12

The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

日本造血細胞移植学会

December 2002

発刊発行：日本造血細胞移植学会 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 名古屋大学医学部第一内科内 TEL (052) 744-2146 FAX (052) 744-2161
発行者：河 敬世 編集責任：日本造血細胞移植学会編集委員会 印刷：株式会社セントラルコンベンションサービス 年4回発行：2002年12月

第25回 日本造血細胞移植学会総会を終えて

第25回日本造血細胞移植学会総会
会長 河 敬世

この度お世話させていただきました第25回日本造血細胞移植学会総会(2002年10月24日,25日 大阪国際会議場)は、会員の皆様方の多大なご支援ならびに関係各位のご協力のお陰をもちまして、無事終了することができました。この場をおかりしまして、ご指導ならびにご協力いただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

今回の総会には410題の一般演題の応募があり、参加者人数も有料参加者が2046名(うち医師が1092名、看護師887名、その他67名)と本学会史上はじめて2000名を超え、いずれも過去最高の記録を更新いたしました。

昨今、学会のあり方が問われておりますが、本学会の参加者は年々増加傾向にあります。移植医療には最先端の知識と技術、経験とチームワークが求められますし、それにふさわしい設備も必要であります。さらに移植医療を支える多くのボランティアの方々のご協力と教育・福祉、医療行政、心理学、生命倫理学などあらゆる分野の専門化集団による包括的かつ集学的な取り組みが不可欠であります。今学会の参加者をみますと、医師や看護師以外の他の職種の方が多数参加され、職種の多様化が一段と進んでいることが分かります。移植医療のさらなる発展、普及、充実を目指してきました本学会の活動が、多くの方々に理解され、広く社会に認知されつつある証ではないかと思えます。

今回のテーマは、HLAのバリアーや年齢のバリアー、人種や国境のバリアーを克服し、移植医療を必要とするすべての患者さんに公正に良質の移植医療を提供するために何をなすべきか、という命題のもとで「バリアーを超えて」といたしました。シンポジウムやワークショップ、一般演題で熱心に討論され、いくつかの改善策が提示され、また解決策の一端が紹介されました。着実に我々が前進していることを実感させられましたが、一朝一夕でこれらのバリアーすべてが克服できるほど簡単で単純なものでないことは周知の事実であります。

次回の第26回総会は加藤俊一会長のお世話で横浜で開催されます。少しでもバリアーを低くできるような成果を携えて、皆様方と元気に横浜の地で再会できますことを祈念いたしまして、御礼のご挨拶とさせていただきます。

日本造血細胞移植学会からのお知らせ

第25回日本造血細胞移植学会総会におきまして理事会、評議員会で討議がなされ、平成14年10月25日の総会において承認されました事項につきお知らせいたします。

- 1.平成15年度の会長は東海大学医学部小児科の加藤俊一で、総会は平成15年12月19日(金)、20日(土)にパシフィコ横浜で開催される予定です。
- 2.平成16年度の会長には岡山大学大学院医歯学総合研究科 病態制御科学専攻の谷本光音が推薦され、評議員会で承認決定しました。会期、会場は未定です。
- 3.評議員選任委員会が、平成14年9月12日にパシフィコ横浜にて開催されました。今村雅寛(委員長)、権藤久司、小林良二、星順隆、中尾眞二、松山孝治の各委員のもと、理事評議員選任規約(細則)及びこれまでの申し合わせ事項に基づき選考が行われました。今回は17名の応募があり、内科系5名、小児科系1名、基礎系1名の計7名が選任された旨、理事会・評議員会にて報告があり、総会において承認されました。以下の7名が平成15年4月1日より評議員となります。

【平成15年度新評議員】

- 赤塚美樹(愛知県がんセンター研究所)、一戸辰夫(京都大学大学院医学研究科)、
今泉益栄(東北大学大学院医学系研究科)、小川啓恭(大阪大学大学院医学系研究科)、
谷口修一(浜の町病院)、藤盛好啓(兵庫医科大学)、
山本一仁(名古屋大学大学院医学系研究科)
- 4.平成15年3月31日にて任期満了となる現監事の坂巻壽(都立駒込病院)に替わり、新監事として、平岡諒(大阪府立成人病センター)が推薦され、承認されました。任期は平成15年4月1日より平成17年3月31日までです。現監事の土屋滋(東北大学加齢医学研究所)の任期は平成16年3月31日までです。
 - 5.編集委員の変更があり岡本隆弘(宝塚市立病院)に替わり、甲斐俊朗(兵庫医科大学)が推薦され、承認されました。
 - 6.名誉会員に長尾大、辻公美が理事会で推薦され、評議員会で承認されました。
 - 7.平成15年3月31日にて任期満了となる理事評議員選任委員の改選が行われ、権藤久司(九州大学医学部)、星順隆(東京慈恵会医科大学)に替わり、谷口修一(浜の町病院)、生田孝一郎(横浜市立大学)が選ばれ、承認されました。また、平成15年度理事評議員選任委員長は、前年度会長である河敬世とします。
 - 8.データ管理委員会より、平成14年度全国調査報告書を総会終了後に送付するとの報告がありました。
 - 9.ガイドライン委員会より、岡本真一郎(慶応義塾大学医学部血液内科)が委員長に決定した旨の報告がありました。
 - 10.臨床研究委員会より、全国レベルで行うプロトコルの提案が3件ありましたとの報告がありました。
 - 11.編集委員会より、ニュースレターNo.9,No.10,No.11の発行があり、No.12,No.13を発行予定であるという報告がありました。
 - 12.PBSCT小委員会から、移植用骨髄血を入れたバックの破損があったとの報告がありました。
 - 13.理事会で、倫理委員会を設置することが決定しました。
 - 14.事務局より学会の平成13年度の決算報告及び平成15年度の予算案が示され、承認されました(決算報告書と予算案を5ページに掲載しています)。
 - 15.事務局より同種末梢血幹細胞移植調査特別事業に関し、平成13年度の決算報告と平成14年度の予算案が示され、承認されました(決算報告書と予算案を6ページ掲載しています)。
- 以上、敬称略

留学生便り

今回はハーバードで研究室を主宰しています赤司浩一先生に文章を依頼しました。渡米されてから10年ほど経っておりますのではや「留学生便り」ではないですが、移植事情にもかなり精通しておられますので面白いお話をご紹介いただけたらと思います。

15年前 私が九州大学第1内科の血液研究室に配属された頃は、骨髄移植術 自家末梢血幹細胞移植術が日本で急速に普及していく時期であった。当時 金沢大学から九州大学に移られたばかりの原田実根現教授の下で 成人の末梢血幹細胞移植術を始めていた その頃 徳島大学において小児の末梢血幹細胞移植術で症例を重ねておられた高上洋一先生が福岡に講演に来られ、その迫力と情熱に圧倒された。当時国外 とくに米国では殆んど症例がなかったこともあり、お二方とも世界に情報を発信するという気概が確かに溢れていた。あの時期 日本における末梢血幹細胞移植術は、世界をリードしていたように思う。その後、数年で米国においても末梢血幹細胞移植は急速に普及した。

臨床 基礎を問わず 米国で研究が一気に進む理由は、個性の発展を容認し支援する姿勢が社会的に備わっているところにあると思う。この文化が個人の情熱や野心を加速させる。すべての個人にその自由があることが重要で、他人も同様の機会を与えられているため、競争の過程で第三者の目を通さねばならなくなる。したがってそこに必ず討論と批判がある。その過程を通じて、ほどよい均衡点にすまやかに達することができる。

再生医学が今、世界的に脚光を浴びている。造血細胞が各臓器に分化したり、逆に臓器幹細胞が造血細胞になったりとなんでもありとも思えるような状況で、high impact journalにはこの種の論文が目白押しである。骨髄細胞から様々な臓器を作り出すことができるかもしれないという仮説は、造血の研究に携わるものとして堪えられない魅力がある。日本では臓器再生に的を絞った研究組織も作られ、国を挙げて追いかける体制が出来つつある。ただ、米国ではこの幹細胞ブームは、個人の情熱の集積であることがはっきりしている点で日本とは違うような気がしてならない。もちろん、バイオニアとしての仕事も米国でなされたことも理由のひとつではある。実務的に考えると、新しい分野に入っていくためには別の研究のための手持ちの予算を割いて、成果を挙げなければならない。失敗すれば研究者本人やスタッフの生活を支えるグラントがなくなる(米国ではサラリーは原則として自分のグラントで賄う)。そのリスクを抱えこめるだけの研究者個人の強力な動機が必要である。この葛藤の結果、同時に多くの批判者が生まれる。再生医学のトレンドに同調しない研究者も米国にはまた数多くいるのである。

研究というものをかじりはじめてから、和を重んじる日本よりも個性を重んじる米国が多施設共同研究を得意としていることが不思議でなかった。日本では患者と主治医の結びつきが強いことが、画一的なプロトコルに乗った治療を妨げているのではと漠然と考えていた。しかし、これも皮肉なことに米国社会の競争原理によるものであろうと今では思う。ハーバードを中心とした白血病治療プログラムのヘッドとして権勢を振るっていた研究者がいた。ところが、同じ分野の権威である研究者が彼の勤める病院の病院長として赴任し、その地位を剥奪された。そのため、その直前に彼はももとのプログラムを超える超大型プロジェクトを立ち上げるために、20人を超える全米およびヨーロッパの臨床家および研究者をボストンに集めた。移植後の免疫回復の研究がそのテーマであった。「このハードスケジュールをこなしたあとの今晚のワインはメルローに決めている」という彼の何ともキザな言葉で始まった討論は2日間続き、総額20億円ほどの巨大プロジェクトが作成された。これだけの数の研究者が彼の名のもとに獲得できるであろう研究費を求めて集まったのは疑いない。強烈な個性と実行力、それに便乗して研究費を獲得しようとする個々の研究者たち、そこには所属機関のしほりなど存在し得ない。この研究費ピラミッドの下に多施設共同研究は堅固なものとなる。

個人的には、このような駆け引きにはついていけない。私も自分の能力で取れる予算で出来る範囲の仕事をこつこつやっつけていかなければ、純日本人である私は常々そう思っている。そんなある日、ひとりの老人が私の部屋を訪ねてきた。80歳を超えているであろう彼は、輝く瞳でこう切り出した。「幹細胞研究がブームと聞いたが、私の開発した細胞凍結法が役に立たないだろうか?」

詳しく聞いてみると、それはhydroxyethyl starch (HES)を用いた細胞凍結法であった。奇しくも顆粒球の凍結法として報告されていたその方法は、15年前九州大学第1内科にて末梢血幹細胞保存に応用する研究のお手伝いをしたことがあったため鮮明に記憶に残っていた。我々の場合、凍結細胞量の多い末梢血幹細胞移植をコストと手間のかかる液体窒素でなく、deep freezerで保存したいという目的のためだった。彼の話によれば、この方法はベトナム戦争時、軍が慢性的血液不足に陥ったとき、本国から戦地に血液を送る方法を開発するために、傷ついた兵士を助ける使命感のもとに研究したのだという。血液保存に最適なHESの分子量をつきとめ生産するのに大変な苦勞をしたらしい。我々の論文を見てみると、申し訳ないことに彼の論文は引用しておらず、顆粒球凍結法として我々が引用していた論文の中に、彼の論文がオリジナルの仕事として引用されていることがわかった。もっとも、凍結細胞解凍時の溶血と移植後のヘモグロビン尿の激しさを考えれば、赤血球保存に対する有効性には多少疑問をもったが、その奇遇に驚いた。

すでに臨床応用され、特に日本ではこの凍結法が幹細胞移植とともに普及していることを我々の論文のリプリントを渡しながら説明した。彼の顔にみるみる驚きが広がる。「今日は自分にとって人生最良の日である。自分がやってきたことが、今、誰かの役に立っている。このことほど自分を興奮させるものはない。あの努力は無駄でなかった。彼はそう言う。足取りも軽く帰っていった。

野心であれ、個人的興味であれ、奉仕の心であれ、どのような形であるにせよ、個人の情熱から全てが始まる。扉を開くには、純粹に動機に導かれて自らを鼓舞し突き進むことが大事なのだろうと今更ながら思う。

(ハーバード大学 準教授 赤司浩一)

「九州造血幹細胞移植看護ネットワーク」の開設とご紹介

浜の町病院 別館三階病棟
師長 福岡 比佐子

移植治療の多様化と対象患者の拡大により、ここ数年で移植症例や移植施設が増加してきており、移植看護に携わる私達は日々研鑽が求められています。その為にも一施設の情報だけでなく、多くの施設からの情報を得たいという思いを日頃より持っていた次第です。

平成13年9月、当院で開催された講演会に各施設から多くの看護師が参加し、その後の交流会では、感染管理や簡略化についての質問が活発になされました。講師からはCDCガイドラインに沿った、又エビデンスに基づいた管理について、多くの示唆を得る事が出来ました。この機会を利用し、施設間の交流を図り、より良い移植看護を目指して「看護ネットワーク」の設立を提案し、福岡県内11、宮崎県・鹿児島県より各1施設、計13施設の賛同を得ました。

アンケート作成、活動方針立案、会則立案などの準備を経て、平成14年7月、第一回の施設代表者会議にて会則が承認され、今後の運営について討議し、各称「九州造血幹細胞移植看護ネットワーク」が発足しました。これは他県の施設も情報が入れば、参加されるかも知れないという期待も込められています。

このネットワークについては、当院医師や他施設医師より、「看護師間の交流を盛んにし、より良い移植看護を」と、背中を押されて発足したという一面もあります。しかし殆どどの施設が、何らかの形で交流の場を待ち望み、必要性を感じていたようです。

11月の2回目の会議では、このネットワークの動きが大きく前進したという手応えを感じました。会を重ねる毎に交流が深まり、会の目的である「ネットワーク間の交流をはかり、移植に関する情報交換、教育等を推進する事で、移植間の向上を図り、社会に寄与すること」に1歩1歩確実に近づいていると言えます。

活動が開始したばかりの14年は、まず教育的な事柄と、2回の講演会を実施しました。講演後の交流会では、講師も含めて会員との意見交換や、情報交換も活発です。今後は看護研究や、同一テーマでの研究、施設見学、移植を受けた患者の相談、会誌の発行など活動内容も広げていく予定です。

ネットワークの事務局は浜の町病院、別館3階病棟で、毎年2施設づつ持ち回りで企画、運営にあたり、この会を発展させていくつもりです。現在参加施設の設備、管理体制、移植情報など冊子の作成に取りかかっています。

今後は九州県内の移植施設へネットワークへの参加を呼びかけたいと思っています。

又、どういう形で実現できるかまだわかりませんが、行く行くは「日本造血細胞移植看護ネットワーク」(HCTNN)との連携も出来ればと考えています。本年度の日本造血細胞移植学会総会のおり、長野県看護大学の方が情報交換のための小児細胞移植施設の看護情報リストを作り活用されている事を知りました。又他の地域でもネットワークを作って活動している所もあるかと思いますが、残念ながらそういう情報を得る手段がありません。(HCTNNでつかんでいるのでしょうか?)

まずは活動を始めたばかりの、このネットワークの基盤を築き、発展させることが責務です。この会の活動に協力的な医師の方々に感謝すると共に、ますます活気ある活動を行っていき、現場で役に立てる事を願うばかりです。